

『バーミンガム史』の形成 —都市の統治と市史の相互関係、 1870年代から1970年代にかけて*—

岩間俊彦

はじめに

本稿は、1952年に刊行されたバーミンガムの市史の特徴、過程、影響について検討する。イングランド中部の中核的な商工業都市であったバーミンガムでは、都市自治体設立100周年（1938年）を記念して、バーミンガム都市自治体による大部な市史の刊行が、企画された。そして、1952年に2巻の市史『バーミンガム史 (*History of Birmingham*)』が出版された¹⁾。これら2巻本は、1960年代以降に発展したイギリス都市史研究のさきがけとして評価されてきた。同市史は、バーミンガムにおける「市民の知的な事業」として、1974年に続刊の第3巻も刊行され、同書も精緻な都市史研究の業績として高い評価を得た²⁾。

本稿では、これらの市史の記述・構成の特徴だけでなく、市史刊行事業の過程や担い手について、一次資料に基づいて明らかにすると共に、同事業の歴史的背景について考察する。まず、バーミンガムの市史が、都市の近代性をあらわす上で重要な役割を果たしたことについて、「シビック・ゴスペル (civic gospel, 市民の教義)」と呼ばれる19世紀後半から20世紀初めにおけるバーミンガム都市自治体を中心とした都市改良と関連する社会的、文化的、政治的環境の活性化という事象をめぐる歴史記述の構築に注目しながら、考察する。

次に、市史『バーミンガム史』の企画や刊行の過程と市史の構成や記述の特

* 本稿は、JSPS 科研費 25285105, 25380434 の助成による成果の一部である。

- 1) Gill (1952) ; Briggs (1952)。これら2巻の表題は、『バーミンガム史』だが、地方自治体が企画した当該都市の歴史の文献について、日本では市史と称することが一般的なので、バーミンガムの都市自治体が企画した当該都市の歴史に関する書籍を称する時は、市史あるいは『バーミンガム史』と表記する。上記の見解について、関東学院大学 名武なつ紀氏と青山学院大学 高嶋修一氏から有益な助言を拝受した。謝意をあらわしたい。
- 2) Cannadine (1975), p.544; Sutcliffe and Smith (1974)。

徴について明らかにする。さらに、市史の刊行の背景と意義について、バーミンガム都市自治体による他の刊行物『バーミンガム自治体史 (*History of the Corporation of Birmingham*)』6巻³⁾との関わり、市史の企画・刊行を担当した都市自治体の委員会の動向、同時代のバーミンガムにおける歴史的背景等から考察する。最後に、バーミンガムの市史の刊行事業が、多様な要因や歴史的背景が交錯しながら実現したことを明らかにすると共に、バーミンガムの市史等から形成された都市の歴史記述の意義について示したい。

バーミンガム史と近代都市の形成—シビック・ゴスペルからの考察

これまで、19世紀中ごろから後半におけるバーミンガムという都市の展開は、近代性をあらわす存在、すなわち、変化とそれに対応する力、変化の担い手たち、そして、都市の成長と知的な変化との共存等を示す存在、とみなされてきた⁴⁾。その根拠とされる現象が、自治体文化 (municipal culture)、公私の機関や活動による交響楽団 (symphony orchestra) と称されるような都市自治体を中心とした都市文化や都市の統治 (ガバナンス (governance)) の形成である⁵⁾。この都市文化または都市の統治の核となるシビック・ゴスペル、本稿では、バーミンガムというコミュニティ (地域社会) に基づく市民の教義あるいは市民の福音と訳す⁶⁾、は、具体的には、19世紀後半に、ジョゼフ・チェンバレン (Joseph Chamberlain, 1836-1914) 等に主導されて、バーミンガム都市自治体を中心に進められた一連の改良事業 (ガス、水道、街路等の都市空間整備) の企画・遂行、支持・受容を指す⁷⁾。

19世紀後半のバーミンガム都市自治体による一連の都市改良の積極的評価と同評価を civic gospel という用語で記述することは、いかに形作られたのだろうか。

3) Bunce (1878), (1885); Vince (1902), (1923); Jones (1940); Black (1957). なお、全6巻の各巻とも、2分冊から成る。

4) Hunt (2004); Gunn (2000).

5) Daunton (2000), pp. 412-413, 838; Morris and Trainor (eds.), (2000).

6) 伊藤 (2009)、41頁。

7) Briggs (1952), chap. IV, esp. p. 131; Briggs (1968), chap. 5; Fraser (1979), pp. 101-110; Hunt (2004), chap. 8. なお、一部の研究者は、同事象を「自治体のゴスペル (municipal gospel)」と呼称している。Henock (1973), Part II. 注13参照。

まず、『オックスフォード英語辞典 第2版 (*Oxford English Dictionary*, 2nd ed. 以下、*OED*)』のオンライン版とCDROM版には、civic gospelに関する用法が掲載されていない。また、19・20世紀の同時代の英語文献を多数収録しているプロクエスト (Proquest) や19世紀文献資料オンライン (Nineteenth Century Collection Online)⁸⁾でも civic gospelの用法は確認できなかった。そこで、*OED*における gospelと civicの用法を確認しよう。

まず、gospelについては、中世 (特に1300年代以降) において、イエス・キリストへの賛歌といった用法があり、人間行為の指針や祈りの対象となりうる行為といった用法は17世紀のジョン・ミルトン、18世紀後半のエドマンド・バークを経て、19世紀でも用いられている。この17-19世紀の gospelの用法は、civic gospelの意味とも合致する。civicについては、都市の市民という意味での citizenを示す civicという用法は、18世紀後半以降にあらわれ、19世紀にも用いられている。また、市民の権利や定義を示す citizenshipの用法もほぼ同じ時期にあらわれ語法として定着している。このような civicの用法が、civic gospelの用法の基礎である。

それでは、上記のような用法の gospelと civicがバーミンガム史で用いられたのはいかなる時期であったのだろうか。その一つが、ミュアヘッドのバーミンガム史の著作にみられるジョージ・ドウソン (George Dawson, 1821-1877) の引用である。ドウソンは、バプテリストを経て非国教会徒の聖職者として、地域社会における行いと信仰の結び付きを説きながら、地方行政の改革の必要性を訴えた人物であった。彼の演説の中に、civic gospelという用語は見つけられなかったが、彼の演説において、人間行為の指針や祈りの対象となりうる行為としての gospelと都市の改良事業を結びつけた用法が確認できる。また、前掲のミュアヘッドの著作において、ドウソンに影響を受けて、バーミンガムの都市改良事業と信仰の結び付きを説いた会衆派のロバート・W・デイル (Robert W. Dale, 1829-1895) が、新たな市民の理想をあらわしていたことも示される⁹⁾。これまでの検討をまとめ

8) 但し、同データベースは2016年3月時点で完結した記録群ではない。

9) Muirhead (1909), pp. 100-101, 276-277と、これらの頁の柱における the new civic idealという用語を参照。

ると、19世紀後半に、ドウソンやデイルの演説や発言において、都市改良とキリスト教の信仰が、gospelやcivicといった用語で表現されるようになり、20世紀初めのバーミンガム史等の文献によって、都市改良をgospelやcivic idealに基づいて記述されるようになったといえよう。

このような用語・歴史記述・解釈は、本稿で検討されるエイザ・ブリッグズ (Asa Briggs, 1921-2016)¹⁰⁾ による1952年のバーミンガムの市史において、civic gospelという用語と共に定着した。ブリッグズによる市史では、19世紀後半のバーミンガムにおける都市改良について、civic revolution、new social gospel、civic gospelと称しているが、civic gospelの用語は一か所のみである¹¹⁾。ブリッグズは、同市史において、19世紀後半のバーミンガムの都市改良というcivic revolutionに関して、ドウソンやデイルといった同時代の非国教徒の聖職者が唱えたgospelという用語であらわすことがふさわしいとしている。そして、ブリッグズによる19世紀の都市史に関する記念碑的業績『ヴィクトリア朝の都市』(1963年)¹²⁾ において、19世紀中ごろから後半のバーミンガムは、「シビック・ゴスペルの形成 (The Making of a Civic Gospel)」として扱われることになった。他方で、ブリッグズの2書以後、19世紀後半のバーミンガムの都市改良について、ドウソンやデイルの発言や活動と共に同時代の都市自治体の構成員を分析したヘノックは、19世紀後半の都市改良を「都市自治体のゴスペル」と称することが適当である、と主張している¹³⁾。19世紀後半の都市改良の名称や理解をcivic gospelとmunicipal gospelのどちらにするかという論争について、結論がついたとはいえないが、20世紀末にチェリーが指摘したように、ブリッグズの市史や『ヴィクトリア朝の都

10) 日本でも数点の翻訳書 (『ヴィクトリア朝の人びと』 ミネルヴァ書房、『イングランド社会史』 筑摩書房等) が刊行されているブリッグズは、1921年5月7日に生まれ、2016年3月15日に亡くなった。‘Asa Briggs obituary’, <http://www.theguardian.com/books/2016/mar/15/lord-briggs-of-lewes-asa-briggs-obituary> (2016年6月13日確認)。中部大学 本内直樹氏からは、ブリッグズについて有益な情報をいただいた。謝意をあらわしたい。Taylor (ed.), (2014) も参照。

11) Briggs (1952), pp. 67-68, 131. 1952年の市史第2巻において、civic gospelはp.131にのみあらわれている。

12) 本稿ではBriggs (1968) を参照した。

13) Hennock (1968), (1973), Part II. 注7参照。

市』とヘノックの著作によって、19世紀中ごろから後半のバーミンガムにおける都市自治体を中心とした改良事業を civic gospelあるいはmunicipal gospelと呼称することが定着したという解釈は、妥当なものといえよう¹⁴⁾。

19世紀後半から20世紀初めにおいて、バーミンガム都市自治体を中核にした都市改良の推進と関連する社会的、文化的、政治的環境の活性化という現象をシビック・ゴスペルと呼称し、シビック・ゴスペルをイギリス近代都市史上における「最上の統治」の一つとして評価するというブリッグズの見解に対して¹⁵⁾、用語や史実の精査、あるいは一次資料の分析といった点から再検討する研究もあらわれた¹⁶⁾。にもかかわらず、19世紀後半の都市自治体による改良事業やそれを支えた価値観や行動様式、すなわち都市の政治社会に関するバーミンガムの評価は、基本的にブリッグズの市史等を基にしながら、都市史だけでなく経済史や社会史の研究者们の間で共有されてきた。そこで、次章以降では、バーミンガムの歴史の近代性を私たちが共有する契機となった市史『バーミンガム史』の企画や刊行の過程や背景について、検討する。

市史『バーミンガム史』の企画・刊行の過程と歴史記述の特徴

はじめに、で記したように、1838年に法人化されたバーミンガム都市自治体は、自治体設立100周年を記念して市史の刊行を企画した。まず、バーミンガム都市自治体の総務委員会 (General Purposes Committee) の資料によると、同委員会の下部組織として、既存の『バーミンガム自治体史』に関する分科委員会 (sub-committee) において、1931年3月30日付けで市史の企画を行うことが承認された¹⁷⁾。1930年代中頃まで、バーミンガム都市自治体の総務委員会や分科委

14) Cherry (1994), p. 77.

15) 注37を参照。

16) Hennock (1968), (1973); Jones (1983); Leighton (2000); Hopkins (2001).

17) BAHS, BCC, HBSC, 30 March 1931, BCC1/AG/37/1/5. なお、同委員会の決定以前の1930年11月17日の総務委員会にて、『バーミンガム自治体史』の出版 (第5巻) と1938年の自治体法人化100周年の記念出版を関連づけて検討することが試みられており、市史『バーミンガム史』の刊行企画に関する始まりとも考えられる。BAHS, BCC, GPC, 17 Nov. 1930, BCC 1/AG/1/1/23.

員会の資料では、既に刊行中の『バーミンガム自治体史』（1878年に第1巻（1852年まで）刊行、1931年の時点で第4巻（1900-1915年）まで刊行）と記念の市史が別企画なのかどうか、判断しにくい記述や整理もあり、記念の市史の企画の位置があいまいな状況にあった。

その後、市史の執筆者に関する選定は速やかに決定されず、ようやく、1936年に、ハル大学のコンラッド・ギル（Conrad Gill, 1883-?）に対して、19世紀以前の部分の原稿が依頼され¹⁸⁾、1937年に、バーミンガム大学のチャールズ・グラント・ロバートソン（Sir Charles Grant Robertson, 1869-1948）に対して、19世紀以降の部分の原稿が依頼されたが¹⁹⁾、都市自治体法人化100年目の1938年に、市史の出版は間に合わなかった。その代わりに、上記の執筆者たちは、共著で小冊子『バーミンガム小史』を1938年に刊行した²⁰⁾。なお、2年後の1940年には、『バーミンガム自治体史』の第5巻（1915-1935年）が出版された。そして、1939年におこった第二次世界大戦が終了するまで、市史の刊行は延期され、1946年に刊行の企画が再開されたが、上記兩名の原稿の脱稿と刊行のめどはたっていないかった²¹⁾。その後、1948年に、執筆者の一人ロバートソンの死去により、エイザ・ブリッグズが彼の担当部分の執筆を行うことになった²²⁾。結局、バーミンガムの市史2巻は、1951年に刊行の目処が立ち、1952年に出版された。

市史出版後、1957年に『バーミンガム自治体史』第6巻（1936-1950年）が出版され、1964年には、『[ヴィクトリア州史] ウォリック州史第7巻 バーミンガム市』（〔*Victoria County History*〕 *A History of County of Warwick, Vol. VII, The City of Birmingham*）も刊行された²³⁾。後者の出版に際しては、市史刊行を担当した分科委

18) BAHS, BCC, GPC, 16 March 1936, BCC1/AG/1/1/27; BAHS, BCC, HBSC, 26 June 1936, BCC1/AG/37/1/8.

19) BAHS, BCC, HBSC, 26 Nov. 1937, BCC1/AG/37/1/9.

20) Gill and Robertson (1938). この小冊子の刊行については、BAHS, BCC, HBSC, 26 Nov., 20 Dec. 1937, BCC1/AG/37/1/9を参照。

21) BAHS, BCC, HBSC, 20 May, 27 June 1946, BCC1/AG/37/1/13.

22) BAHS, BCC, GPC, 21 June 1948, 21 Feb. 1949, BCC 1/AG/1/1/35; BAHS, BCC, HBSC, 23 Feb., 12 April 1948, BCC1/AG/37/1/14.

23) Black (1957); Stephens (ed.), (1964). なお、主として地理学の成果だが、The British Association (1970)〔初版は1950年〕も刊行された。

員会に、ブリッグズの執筆部分（19世紀のバーミンガム社会史）等について照会があり、同委員会は、前掲『〔ヴィクトリア州史〕バーミンガム市』のブリッグズの執筆箇所は、既刊の市史の概要（abstract）を収録することを承認した²⁴⁾。そして、1939から1970年を対象とした市史の第3巻目に関する企画・出版を担当する分科委員会が1965年に設置され²⁵⁾、1974年に市史第3巻が刊行された²⁶⁾。

次に、1952年に刊行された市史2巻の特徴について、特にブリッグズの巻に注目しながら、整理しよう。ギルによる市史第1巻は1865年までの時期を扱う。目次は18章からなり、1086年から1865年の年表が付されている。年表を含めた本文は454頁で、序文・目次等・図版・別刷り地図等は別頁で、合計70頁程度である。最初の4章の60頁ほどで古代、中世、近世の記述を展開し、18世紀から19世紀半ばについては、14章、380頁ほどで記述する。

ギルの巻に対して、ブリッグズの巻は、1860年代から1938年までの約90年について、10章、320頁ほどで記述する。2巻目には、本文とは別に年表、自治体の市長や名誉市民、主要な自治体役職者一覧等が付される（合計20頁程度）。目次の構成は、2巻とも基本的に編年体だが、18世紀後半から19世紀後半までは、特定の時期のテーマ、例えば、ギルによる第1巻では、18-19世紀の都市改良、議会改革、都市自治体改革とバーミンガム都市自治体の誕生、自治体の誕生と展開、鉄道の時代、等々、ブリッグズによる第2巻では、19世紀中ごろから後半における地域社会の枠組み、都市の動向、世界の工場、世界で最上の統治を実現した都市、拡大したバーミンガム都市自治体、コーカス（caucus、政党幹部会）による政治、によって構成されている。なお、両巻とも注記をできるだけ少なくし、最低限の脚注と、章末に参考文献を付す書式である²⁷⁾。このように、1952年刊の市史が、18世紀紀以降、とりわけ19世紀前半から中ごろ以降の近代の時期を重視していることは明らかである。

24) BAHS, BCC, HBSC, 13 Oct. 1950, BCC1/AG/37/1/16, 1 Nov. 1951, BCC1/AG/37/1/17.

25) BAHS, BCC, GPC, 11 Jan., 13 Dec. 1965, BCC 1/AG/1/1/52, 9 Jan. 1967, BCC 1/AG/1/1/54; BAHS, BCC, HBSC, 12 Jan. 1966, BCC1/AG/37/1/32.

26) Sutcliffe and Smith (1974).

27) ブリッグズの巻には、章末の参考文献は掲載されていない。

1952年の市史、特にブリッグズによる第2巻、は、未刊行の手稿等の新資料を用いて、新たな事実の発見や資料分析の水準を高めたわけではなく、主として同時代の文献や二次文献に依拠しながらバーミンガムの政治・経済・社会・文化の包括的な歴史について、記している。よって、1952年の市史は、既刊のバーミンガム史の歴史叙述の継承・展開という特徴も有している。

まず、18世紀後半に刊行されたウィリアム・ハットン (William Hutton, 1723-1815) によるバーミンガム史からは、18世紀におけるバーミンガムの経済社会の活力とその発展だけでなく、都市への誇りに関する歴史像を継承した²⁸⁾。バーミンガムという都市社会の活力や変化という視点は、1巻だけでなく2巻においても意識されている。次に、19世紀のバーミンガムの公共制度の発展や同時代の人びとの公的活動や意識 (改良精神、自助、進歩への信頼) といった特徴は、J・A・ラングフォード (J.A. Langford, 1823-1903) によるバーミンガムの公共制度に関する著作等から大きな影響を受けている²⁹⁾。さらに、19世紀末から20世紀初めの都市の制度の発展、19世紀から20世紀にかけての経済社会の構造、そしてジョゼフ・チェンバレンをはじめとする特定の人物の活躍というバーミンガム史の記述は、『バーミンガム自治体史』をはじめとする19世紀後半から20世紀初めまでのバーミンガム史の著作の情報や記述を参照している³⁰⁾。

1952年の市史の構想や概略を形作った『バーミンガム小史』は、90頁ほどの小冊子で、基本的に都市の経済社会の発展の過程、都市の発展と自治体の発展を記述しているが、19世紀には、都市の生活や社会の変化と、自治体や都市社会経済の関わりを示しているだけでなく、ジョゼフ・チェンバレンやキャドバリー家等の19世紀バーミンガムの偉人についての項目もある³¹⁾。同小冊子では、バーミンガム都市自治体の発展は民主主義 (democracy) の発展として認識されてお

28) Hutton (1781).

29) Langford (1873).

30) 注28、29の他、Timmins (1866); Dent (1894); Muirhead (1909), (1911); Masterman (1920); Allen (1929). 例えば、アレンの著作が示した戦間期のバーミンガムにおける旧産業 (金属工業、機械工業) の衰退や再編と新産業 (自動車等) の展開といった記述が、ブリッグズの市史では取り入れられている。長谷川 (1993)、124-126頁。

31) Gill and Robertson (1938).

り、このような制度や組織の展開と民主主義のような近代の理念の発展との関わりという視点は、1952年の市史にも継承された。

ここで、1952年の市史に先行して刊行され、かつ、同市史も参照先としてきた『バーミンガム自治体史』との記述を比較検討してみよう。まず、後者の『バーミンガム自治体史』1巻から6巻における目次の基本構成には、大きな変更は見られない。いずれの自治体史の巻についても、自治体の機関全体の概要を記した後、委員会や部局 (department) ごとの活動が、編年体で記されている。これらの活動に関する記述は、案件の承認や事案の遂行といった事実を記すことが中心である³²⁾。特に、20世紀以降を扱った4巻から6巻では、限られた紙幅と自治体の記録量の激増を背景にして、上記の自治体業務の事実を簡潔に記述する傾向が、顕著である。にもかかわらず、『バーミンガム自治体史』の記述内容に変化が生じたこともある。例えば、1巻と2巻では、自治体内の党派争いについて言及されなかったが、1885から1899年を扱う第3巻では、都市自治体における党派の動向について記述が追加されるようになった。しかしながら、党派の記録といった記述上の変化も、4巻以降、自治体の各委員会の記録が急増したため、再び、前述のとおり、委員会の活動に関する事実の記録が記述の中心となった。また、2度の世界大戦におけるバーミンガム都市自治体と住民の対応や変化については、各委員会とは別に活動記録を収録するといったことも見られた。

このような『バーミンガム自治体史』と比較して、1952年の市史2巻では、第一に、バーミンガムという都市の地域社会を描こうとする姿勢が、第1巻のギルの序文や第2巻のブリッグズの最初の章の題、地域社会の枠組み (The Framework of a Community)、が示すように、明快である³³⁾。言い換えれば、バーミンガムという地域社会について、経済社会、政治、都市空間、都市の制度、都

32) 通常、『バーミンガム自治体史』では、各巻の扱う時期の自治体に関する主要な出来事を整理したのち、財政、課税と関連する評価機構、(20世紀には)国家の福利厚生機構との関わり、交通、ガス、電力、水資源とその提供、市場、公共の保健、教育、公的事業、不動産・住宅・設備等、警察機構、地方法廷、消防、博物館等、公浴場、公園娯楽、排水設備、(20世紀には)自治体金融機関、食物動物検査、公共図書館、労務・賃金、その他、等々に関する委員会あるいは部局の章によって構成されていた。Bunce (1878), (1885); Vince (1902), (1923); Jones (1940); Black (1957).

33) Gill (1952), p. viii; Briggs (1952), pp. 1-10.

市の人びとを関連付けながら描く姿勢は、バーミンガムの市史に通底している。このような記述の形は、ブリッグズ自身の先行研究を統合・再構築し³⁴⁾、後に彼自身が展開する社会史研究、あるいは、全体史の基礎にもなりうるものであった。

この姿勢の上に、第二に、特にブリッグズによる市史第2巻は、都市自治体だけでなく関連する機関、人物、当時の価値観や社会関係を含む都市の利害関係とその展開をあらわす都市の統治³⁵⁾を記述したという点で、画期的であった。このような記述は、ブリッグズが、1865から1914年、世紀転換期、1914から1918年、そして1918から1938年といった時代区分のもと、各時期において鍵となる歴史的背景を明確にして、制度、活動、関係、思想や価値といった事柄を包括的に示してゆく「全体史」の志向とも合致していた。結果として、ブリッグズによる19世紀後半のバーミンガムの統治の記述は、都市エリート（都市の主導的人物）に注目しながら、制度の展開、組織、運動を関連付けることとなった。特に、バーミンガムのエリートとして、ジョゼフ・チェンバレンとその家族がいかにバーミンガムと関わってきたのか、そして、チェンバレン家がバーミンガムの政治・経済・社会から距離をおくようになったのかということが、市史第2巻では重点的に描かれている。なお、市史刊行後、ブリッグズは、ジョゼフ・チェンバレンの研究に着手する予定だったが、他の研究者が同研究を進めていたことから上記の計画を取りやめた³⁶⁾。

他方で、1974年に刊行された市史第3巻では、チェンバレン家のバーミンガム都市自治体からの退場が、簡潔に記される一方で、戦間期から戦後にかけての都市自治体内の主導的人物に関する記述が、増加した。要約すると、バーミンガムの中心的人物をバーミンガム史の記述の中に据えることは、1952年の市史以前のバーミンガム史に関する著作で試みられていたが、バーミンガムの主導的人物と都市の統治を結びつけた都市史の記述にこそ、ブリッグズの独自性があった。

また、ブリッグズによる市史は、シカゴ学派の都市社会学の業績をヴィクトリア期の都市の分析に関連付けただけでなく、1890年代のアメリカ人のイギリス

34) Briggs (1948a), (1948b), (1950).

35) Morris and Trainor (eds.), (2000).

36) Briggs (2012), pp. 145-147.

都市に関する評価を発見・引用したことも注目に値する。市史第2巻では、「世界で最上の統治が行われている都市 (the best-governed city in the world) という同時代のアメリカの定期刊行物からの引用を章の題名に用いながら、バーミンガムの都市改良とその背景を同時代のシカゴと比較検討することによって、バーミンガムの都市改良という事象を他都市と相互に参照する可能性を切り開き、のちの都市史研究に大きな影響を与えた³⁷⁾。

このように、バーミンガムの市史、特に、ブリッグズによる第2巻の記述は、彼自身の個性、すなわち、全体史と人物への注目、社会史への展開の可能性、都市社会学研究の積極的な援用、に大きく依拠していた³⁸⁾。但し、デイビッド・キャナダインが指摘したように、ブリッグズの市史は、19世紀中ごろから20世紀前半のバーミンガムにおいて、個人の英雄劇と公的な活動を結びつけた魅力的な歴史記述であったが、同時代について異なった都市史の記述の方法もあろう³⁹⁾。また、既に言及したように、バーミンガム史に関する史料の開拓という点で、ブリッグズだけでなくギルの巻も含めた市史2巻では、書簡や日記といった未刊行の手稿は、十分に参照・引用・検討されたとはいえない状況にあった⁴⁰⁾。このような限界があるとしても、1952年の市史2巻は、前述のとおり、19世紀の近代都市の記述、とりわけ、ガバナンスの記述について、新たな水準かつ視点を提供した刊行事業であることは、確認したい。

なお、市史2巻の刊行に対する当時の反響・評判は、出版市場だけでなくバーミンガムにおいて、高いものであったと断定することは難しい。たしかに、『タ

37) Ralph (1890). 文献中において、最上の統治が行われている都市では、文明開化し協同性を持った市民による自治が存在することや、ビジネスマンやビジネスの原則にそって運営されていること等が、あげられている。また、筆者のラルフは、同時代のバーミンガムでは、シカゴのように思慮深い人々が存在したことを指摘しただけでなく、バーミンガムにおける自由都市、労働者階級の自立、(外国の)知識人を取り込む空間、小規模独立業者の優勢と公的活動への参加といった点にも注目している。シカゴの都市観については、ブリッグズも参照しているRalph (1893)も参照。

38) Briggs (2012), pp. 95, 145-149; Dyos (ed.), (1968), pp. vii-ix; Taylor (ed.), (2014), pp. 6-7, 30-31, 36-38, 81-8; 長谷川 (1993), 111-112頁。

39) Cannadine and Reeder (eds.), (1982), pp. 215-216; Cannadine (1976), pp. 541-544. 例えば、都市内の要因だけでなく都市外や都市間の関係や影響といった点があげられる。

40) Dyos (ed.), (1968), p. 30.

イムズ文芸評論 (*Times Literary Supplement*)』や『ニュー・ステイツマン (*New Statesman*)』において、また、『バーミンガム・ガゼット (*Birmingham Gazette*)』のようなバーミンガムの地方紙の一部において肯定的評価があった一方で⁴¹⁾、その他のバーミンガムの地方新聞や他の新聞にて、バーミンガムの市史に関する反響を筆者は確認できなかった⁴²⁾。他方で、学術分野において、『経済史評論 (*Economic History Review*)』等では高い評価を得ており⁴³⁾、市史『バーミンガム史』の刊行は、イギリスにおける都市の歴史や社会の歴史に関する新たな潮流の始まりの一つと位置付けられる。実際、市史刊行後、同書の成果を踏まえて、ブリッグズは、著名な『ヴィクトリア朝の都市』を出版し、レスター大学のH・J・ダイオス等による都市史研究の成果も1960年代に展開する中で、ダイオス自身がバーミンガムの市史をイギリス都市史の先駆的業績として位置づけていた⁴⁴⁾。

それでは、バーミンガム以外のイギリスの主要地方都市、例えば、マンチェスタ、リヴァプール、リーズ等では、バーミンガムの市史から影響を受けて、都市ガバナンスや近代性をあらわすような市史の刊行が、行われたのだろうか。上記の地方都市でも、市史（特に自治体の歴史）の刊行は確認できる（その一部は出版年等から自治体の記念事業と思われる）⁴⁵⁾。しかしながら、筆者自身は、バーミ

41) *Times Literary Supplement*, 10 Oct. 1952; *New Statesman*, 30 Aug. 1952. 『バーミンガム・ガゼット』は1952年の号と考えられる。Sutcliffe and Smith (1974)のカバーにおける引用による。但し、バーミンガム市図書館に所蔵されている上記新聞のマイクロフィルムを筆者は調査したが、引用を確認できなかった。

42) 分科委員会の記録によると、主要な学会誌 (*English Historical Review*; *History*; *Bulletin of the Institute of Historical Research*; *Economic History Review*)、定期刊行物 (新聞 *Birmingham Post*; *Manchester Guardian*、雑誌 *Times Literary Supplement*; *New Statesman*; *World Review*; *Contemporary Review*; *Fortnightly*; *Quarterly Review*) への献本や、広報 (広告掲載を進めるものとして、*Times Literary Supplement*; *New Statesman*; *Birmingham Post*; *Contemporary Review*; *World Review*; *English Historical Review*; *Manchester Guardian*、広告を検討する対象として、*Birmingham Mail*; *Birmingham Weekly Mail*) が行われたようである。BAHS, BCC, HBSC, 2 July 1952, BCC1/AG/37/1/18. しかしながら、上記定期刊行物全てに書評が掲載されたわけではなかったし、広告等も上記の新聞や雑誌の一部でしか確認できなかった。バーミンガム市図書館所蔵の *Birmingham Post*; *Birmingham Mail* のマイクロフィルムの調査、British Newspaper Archive、The Times Digital Archive、Proquest等のデータベースによる。

43) Checkland (1953) は書評論文である。その他、*English Historical Review*, 68 (1953), pp. 270-273; *American Historical Review*, 58 (1953), pp. 611-612にも書評が掲載された。

44) Briggs (1968); Dyos (ed.), (1968), p.30; Cannadine and Reeder (eds.), (1982), pp. 215-216.

45) 簡単にはBriggs (1968)の文献目録を参照。19世紀までの書誌についてはGross (1966)を参照。

ンガムの市史刊行が、他都市の自負心・競争意識・市民意識に作用して、他の地方都市における市史の刊行を活性化させたという直接の証言を今のところ発見していない。にもかかわらず、1952年の市史『バーミンガム史』が、自治体による市史刊行物の中で最も良質かつ代表的な成果の一つであること、また、20世紀後半以降の都市史や地域社会史の先駆的業績であったことについては、イギリス都市史の研究者の間での了解事項といえるだろう。

市史『バーミンガム史』の企画・刊行の背景と意義

本章では、1952年に出版された市史『バーミンガム史』刊行の背景や意義について、『バーミンガム自治体史』との関係、都市自治体の市史刊行に関する遂行・担当者・関与から考察したい。

第一に、市史の刊行企画は、シビック・ゴスペルの一部でもあったバーミンガム都市自治体に関する記録の公刊事業『バーミンガム自治体史』を発展・継承していた。前章で示したとおり、1952年の市史は、都市の統治を記述したという点で先駆的であった。他方で、シビック・ゴスペルが展開する中、1876年に企画が始まった『バーミンガム自治体史』の刊行目的によれば、この刊行事業は、過去の都市の記録を集成して公正な行政の実現の参照先とすることを目指しており、まさに、都市行政の歴史を都市の統治として活用する実例であった⁴⁶⁾。1952年の市史は、『バーミンガム自治体史』の当初の刊行目的を継承・発展させ、都市自治体を含むより包括的な都市ガバナンスの歴史記述を実現しただけでなく、より幅広い読者を対象にした出版物でもあった。

第二に、バーミンガムの市史の企画は、市史刊行を担当する委員会（総務委員会、下部組織の分科委員会）の意図、執筆依頼や執筆者自身に関する問題、1930年代末から1940年代の第二次世界大戦の影響といったことを背景にして、刊行までたどりついた。

市史刊行に関する分科委員会の構成員には（表1）、バーミンガム都市自治体の指導的立場の人物（あるいは、かつて指導的立場にあった人物）が多く、都市

46) BAHS, BCC, BBPC, 11 Jan. 1876, L34.3; Bunce (1878), p. iii; Fraser (1979), chap. 4.

表1 『バーミンガム自治体史』または市史『バーミンガム史』の分科委員会構成員、1930-1952年⁴⁷⁾

年 市史補足説明	市参事会員 /市議会員	氏名	特記(年号に付す年は全て省略)
1930年 市史刊行検討 開始	市参事会員	W.A. Cadbury* ※ (1867-1957)	市議会員 1911より、市参事会員 1919-1943、 市長 1919、名誉市民 1938、実業家(チョコレート 製造業等)、クエーカー
	市参事会員	Samuel John Grey (?-1942)	市議会員 1919より、市参事会員 1930より
	市参事会員	W.B. Kenrick* ※ (1872-1962)	市議会員 1914より、市参事会員 1929より、市 長 1928、名誉市民 1938、統一党(保守党) の中心人物、実業家(金属製品製造業等)、 市の教育事業に貢献、チェンバレン家との繋が りあり、ユニテリアン
	市参事会員	Ernest Martineau	市議会員 1901より、市参事会員 1914-1945、 市長 1912、名誉市民 1938、第一次世界大戦 中の功績からC. M. G. を叙勲された
	市議会員	C.J. Simmons	市議会員 1921-1945、労働党?
1937年 1938年の市史 刊行断念	市参事会員	Sir John Burman ※ (1867-1941)	市議会員 1908より、市参事会員 1931より、市 長 1931
	市参事会員	W.A. Cadbury* ※	1930年参照
	市参事会員	W.B. Kenrick* ※	1930年参照
	市参事会員	Oliver Morland	市議会員 1919より、市参事会員 1936-1945
1946年 市史再着手	市参事会員	W.B. Kenrick* ※	1930年参照
	市参事会員	Sir Wilfrid Martineau* ※ (1889-1964)	市議会員 1932より、市参事会員 1941より、市 長 1940、統一党(保守党)の中心人物、市 の教育や文化活動に貢献、チェンバレン家と の繋がりあり、ユニテリアン
1948 執筆者(ギル とブリッグズ) 確定	市参事会員	W.B. Kenrick* ※	1930年参照
	市参事会員	Sir W. Martineau* ※	1946年参照
	市参事会員	William Theophilus Wiggins-Davies ※	市議会員 1927より、市参事会員 1945より、市 長 1944
	市議会員	D.S. Thomas	市議会員 1945より、労働党?
1952年 市史刊行	市参事会員	G.C. Barrow	市議会員 1945より、市参事会員 1952より
	市参事会員	Sir J. Burman ※	
	市参事会員	Theodore Beal Pritchett (1890-1960)	市議会員 1924より、市参事会員 1940より、 市長 1939、名誉市民 1960、統一党(保守党)
	市参事会員	W.E. Wheeldon	市議会員 1927より、市参事会員 1945より
	市議会員	Mrs. E.M. Crosskey	市議会員 1945より、労働党

*Briggs (1952) の謝辞、※ Gill (1952) の謝辞に記載がある人物。特記は初出時記載。

47) バーミンガム自治体の市議会員、市参事会員、市長の就任時期、党派、宗派、都市エリート間のつながり、関連する事業等については判明のみ。BAHS, BCC, GPC, 1929-1974, BCC 1/AG/1/1/22-65; BAHS, BCC, HBSC, 1930-1972, BCC1/AG/37/1/5-38; *BYWW*; Gill (1952); Briggs (1952); Sutcliffe and Smith (1974) 等より作成。

エリート、あるいは、都市の名望家を中心であったと言い換えることもできる。また、チェンバレン家と関係の深い人物や同家と繋がりのある党派の人物が、分科委員会の構成員に含まれていた。市史が企画刊行された1930年代から1950年代のバーミンガム都市自治体における党派の動向に注目すると、まず、1930年代において、チェンバレン家と関係の深い集団が支配的な党派（同時代のバーミンガムの党派の名称では、ユニオニスト（Unionist、統一党）または保守党（Conservative）とされる）を形成していた時代であった。1930年代後半から1950年代前半には、前述の支配的党派（ユニオニストまたは保守党）と労働党（Labour）の間で競合あるいは併存する状況が続いた。但し、このような状況にもかかわらず、都市自治体の主要役職は、1950年代前半まで、ユニオニストの都市エリートが担っていた。

1950年代から1970年代は、バーミンガム都市自治体において、党派の競合（労働党とユニオニスト（または保守党））の時期であった。同時代の分科委員会のメンバーには（表2）、都市自治体や党派の指導者が含まれていたが、党派運営の最前線から退いてから分科委員会に参加した人物もいた。また、この時期に、市史の記述をめぐって党派間の抗争が生じるような事態は、おこらなかった⁴⁸⁾。市史担当の分科委員会は、バーミンガム都市自治体の財政・交通・教育等の委員会に比べて中核の委員会事業でなかったこともあり⁴⁹⁾、相対的に党派間、議員間の利害対立の場とならなかったと思われる。

48) 1950年代以前も同様であった。BAHS, BCC, GPC, 1929-1974, BCC 1/AG/1/1/22-65; BAHS, BCC, HBSC, 1930-1972, BCC1/AG/37/1/5-38.

49) Morris and Newton (1969a), (1969b), (1969c), (1969d). 『バーミンガム自治体史』でも、同書や市史『バーミンガム史』に関する委員会の記述は、単独の章や節で記述されることもなく、筆者が確認した限りでは、刊行企画に関する記述もほとんど見当たらない。また、バーミンガム自治体の主要な委員会とその構成員を掲載するバーミンガムの年鑑でも、市史の分科委員会の委員のリストは、筆者が確認した限りで、1年度（1938年）のみ掲載されただけであった。BYWW, 1930, 1938, 1950, 1952, 1953, 1966, 1971, 1973, 1974.

表2 『バーミンガム自治体史』または市史『バーミンガム史』の分科委員会構成員、1966-1972年⁵⁰⁾

年 市史補足説明	地位	氏名	特記（年号に付す年は全て省略）
1966年 続刊の企画	市参事会員	Harry Watton (1904-?)+	市議会議員1946より、市参事会員1952より、名誉市民1970、バーミンガムにおける労働党の指導者（1959-1966）、市の郊外拡張やニュータウン計画支持、劇場や展覧会場の建設に尽力の反面、歴史的産業遺産については否定的態度
	市参事会員	Francis Griffin	市議会議員1949より、名誉市民1970、統一党（保守党）の指導者（1960年代中頃）、自動車取引業者
	市参事会員	Mrs. E.V. Smith	市議会議員1945より、市参事会員1952より、保守党
	書記長	R.D. Siddall	
	市長	Harold Edward Tyler	
1971年 草稿検討	市参事会員	Sir Francis Griffin+	1966年参照
	市参事会員	Eric Edward Mole+	市議会議員1944より、市長1961
	市参事会員	Harry Watton+	1966年参照
	書記長	P. Booth+	
	市長	Victor Ernest Turton	市議会議員1945より
1972年 刊行準備	市参事会員	Sir Francis Griffin+	1966年参照
	市参事会員	Ernest Walter Horton+	市議会議員1947より、市長1962
	市参事会員	Eric Edward Mole+	1971年参照
	市参事会員	Harry Watton+	1966年参照
	市長	Frederick Thomas Duncan Hall	

+Sutcliffe and Smith（1974）の謝辞に記載がある人物。特記は初出時記載。

市史が企画・刊行された時期は、都市エリートを顕彰する儀式の衰退⁵¹⁾、中流階級の郊外住宅地として代表的なエジバストーン（Edgbaston）を含むバーミンガム郊外の変貌、すなわち、不動産開発や管理を基礎とした地主貴族の権勢の後退や、自動車産業をはじめとする新産業の郊外地における展開⁵²⁾、自治体議員の職

50) 注48に同じ。

51) Gunn (2000), pp. 187-197; Cannadine (2000).

52) Cannadine (1980), chap. 10-14; Cherry (1994); Sutcliffe and Smith (1974).

業や社会的地位（教育、年齢、性）の変化⁵³⁾が、進行していた。このような社会、経済、政治の変化が生じたバーミンガムにおいて、都市エリートあるいは名望家が主導した市史の刊行では、19世紀の都市自治体の改良や統治の正当性と意義、それらと共に展開した人的関係、都市空間、社会生活、工業化等を明確に記述した上で、1938年のバーミンガム都市自治体の正当性と将来への展望を示す記述が、バーミンガム都市自治体では求められていたのである。

そして、分科委員会は、ジャーナリストや著述家に執筆依頼を行った『バーミンガム自治体史』とは異なり、市史の執筆者に学術機関の研究者をあてることにした。この執筆者選定の相違は、自治体史と比べて市史では、学術的な水準や地位を保ちつつ一般読者に向けた書籍を刊行するという意図によるものであった⁵⁴⁾。しかしながら、コンラッド・ギル、チャールズ・グラント・ロバートソン共に執筆が遅れたため、前章で示したとおり、自治体法人化100周年の1938年には、市史の刊行が間に合わず、その代わりに、両執筆者による『バーミンガム小史』という小冊子が刊行された。

さらに、市史の刊行は、1939年におこった第二次世界大戦により、都市自治体が出版延期を決定したことから、ますます遅れることになった。また、戦時中と戦後直後には、市史あるいは自治体史の分科委員会において、バーミンガムにおける戦時の記録を反映した市史を刊行しようとする提案もなされており、戦争の事実や記憶を記録した市史の刊行と遅れていた自治体法人化100周年のための市史の刊行とが、混在し、出版の企画の混乱が見られた⁵⁵⁾。結局、前者の大戦

53) 市議会員や市参事会員の構成の中心は、19世紀後半以来の都市エリートや伝統産業（金属、機械）の担い手から、専門職やホワイトカラー層に重点が移り、55歳以上の議員が占める割合も低下した。また、1950年代初め以降、女性の市議会員（後には市参事会員も）が増加した。両大戦間期から1960年代にかけて、バーミンガムの産業構造でも、製造業の重要性は残っていたが、雇用の多くは第3次産業に移行していった。Hennock (1968) ; Sutcliffe and Smith (1974) ; Morris and Newton (1968) , (1969a) , (1969b) , (1969c) , (1969d) ; Newton (1976) .

54) BAHS, BCC, HBSC, 30 March 1931, BCC1/AG/37/1/5, 7 May, 22 Oct., 19 Nov. 1935, 26 June 1936, BCC1/AG/37/1/8.

55) BAHS, BCC, GPC, 3 Dec. 1941, BCC 1/AG/1/1/31, 16 Oct. 1944, BCC 1/AG/1/1/32, 14 May 1945, BCC 1/AG/1/1/33; BAHS, BCC, HBSC, 18 Dec. 1940, BCC1/AG/37/1/12, 20 May 1946, BCC1/AG/37/1/13.

の事実を記録したバーミンガム都市自治体による市史の刊行は、1940年代末から1950年代にかけては実現せず、後に、1957年刊行の『バーミンガム自治体史』第6巻と1974年の市史第3巻において、第二次世界大戦期におけるバーミンガムの事実が整理・記述された。

また、第二次世界大戦後、ロバートソンは、執筆の断念とギルが彼の担当部分を執筆することを提案したが、分科委員会を介してギルとロバートソンの間で冷めたやり取りが行われた後、結局、ギルは、バーミンガムでの追加調査等が困難であること等から執筆の引き継ぎを拒否した⁵⁶⁾。ロバートソンから分科委員会宛の書面において、彼は、第二次世界大戦によって、市史を脱稿することがいっそう困難になったとあらわしていたが、1948年にロバートソンの後を引き継いだブリッグズによると、前任者の出版準備はほとんど行われていなかったようであった⁵⁷⁾。このように、市史刊行の遅れは、第二次世界大戦の影響だけでなく、総務委員会や市史の分科委員会の意図、執筆者自身の問題が絡み合ったことによるものであった。

第三に、市史の分科委員会は、1952年の企画出版と1974年の企画出版において、執筆者の原稿執筆に対する関与の形を変化させた。第1・2巻の刊行時には、刊行の大幅な遅れ、執筆分担をめぐる対立、執筆者の変更等もあり、ギルの記述だけでなく新進の研究者であったブリッグズによる当時としては新たな試みともみられる記述内容、例えば、都市エリートの統治観とそれを支える空間・関係・制度・行動・価値観を全体史として描く形に、分科委員会から、不満は表明されなかった⁵⁸⁾。分科委員会に代表されるバーミンガム都市自治体は、都市自治体の制度や自治体を含めた文化の展開を通じて19世紀後半のバーミンガムの統治を明快に描くこと、また、これらの展開の背景にあった政治・経済・社会、第一次世界大戦の記録を記述することを重視していたと思われる。

56) BAHS, BCC, HBSC, 20 May, 27 June 1946, BCC1/AG/37/1/13.

57) BAHS, BCC, HBSC, 27 June 1946, BCC1/AG/37/1/13; Briggs (2012), p. 63.

58) BAHS, BCC, HBSC, 18 Oct. 1948, BCC1/AG/37/1/15, 2 Nov. 1949, 13 Oct. 1950, 9 Nov. 1950, BCC1/AG/37/1/16, 1 Nov. 1951, BCC1/AG/37/1/17.

他方で、1965年に設置された市史第3巻に関する分科委員会では⁵⁹⁾、執筆者と委員会の間に対立が生じた。具体的な経緯は、以下のとおりである。

まず、バーミンガム大学のアンソニー・サットクリフ (Anthony Sutcliffe, 1942-2011) とロジャー・スミス (Roger Smith) の草稿に対して、分科委員会が厳しい批判を展開した⁶⁰⁾。その後、分科委員会に対する執筆者からの反論があり、原稿の再提出が困難な状況となった。そこで、分科委員会は、市史執筆者の選定を依頼したバーミンガム大学歴史学科に上記問題の解決策を照会し、ロドニー・ヒルトン (Rodney Hilton, 1916-2002) が、分科委員会と執筆者の間の仲介に当たることとなった。

仲介の間では、ヒルトン主導で、分科委員会の見解や行為は学術的な成果である原稿への検閲 (censorship) にあたる可能性があることについて指摘されたり、執筆者による原稿取り下げと執筆中止もありうることを示唆されたりしながら、市史刊行を目指して、執筆者と分科委員会の間で見解のすり合わせが、進められた⁶¹⁾。結局、改訂した原稿を執筆者が分科委員会に提出することとなり、その後、提出された改訂原稿は、分科委員会で承認された⁶²⁾。

分科委員会で問題となった当初の原稿は、委員会資料に収録されていないが、同委員会の記録によると、委員会が特に問題としたのが、第二次世界大戦後のバーミンガムの都市計画に大きな影響を及ぼしたハーバート・マンツオーニ (Sir Hebert Manzoni, 1899-1972)⁶³⁾ をめぐる評価であった。例えば、当初の原稿において、マンツオーニが進めた都市計画に対して高い評価を与えていなかった点をはじめとして、ハリー・ワットン (Harry Watton, 1904-?, 20世紀半ばのバーミンガムにおける労働党の指導者) 等による党派活動に関する記述等といった点についても、分科委員会は問題にした⁶⁴⁾。結局、1974年に刊行された市史第3巻では、

59) 注25参照。

60) BAHS, BCC, HBSC, 17 Aug. 1971, BCC1/AG/37/1/37.

61) BAHS, BCC, HBSC, 17 Sep., 24 Sep. 1971, BCC1/AG/37/1/37.

62) BAHS, BCC, HBSC, 3 July 1972, BCC1/AG/37/1/38.

63) *Oxford Dictionary of Biography*, Oxford University Press, Oxford (2004) における同人物の項目も参照。

64) BAHS, BCC, HBSC, 17 Aug., 17 Sep., 24 Sep. 1971, BCC1/AG/37/1/37.

バーミンガムの行政組織が、戦後に組織を拡大させながら、都市問題に対応してきたことを記述しつつ、そのような行政の対応の中でマンツォーニやワットン等の人物が重要な役割を担っていたことが、強調された。

このように、市史第3巻では、財政や教育をめぐって都市自治体内で党派間の対立が生じていた時期にもかかわらず、チェンバレン家のバーミンガム都市自治体の活動からの離脱と、第二次世界大戦後の復興、すなわち、各行政部門の進展と変化、都市空間の再建や新規開発、という認識は、党派を超えて市議員や市参事会員の間で共有されていた⁶⁵⁾。1960年代から1970年代のバーミンガム都市自治体では、都市空間の再編や発展と自治体組織の展開という「史実」を市史において整理・記録することに強い意欲がみられたのである。

最後に、1974年の刊行をもって、バーミンガムの市史の企画は終了した。キャナダインによれば、「市民の知的な企業」が終焉を迎えたのである⁶⁶⁾。また、1970年代初めに市史や自治体史の分科委員会で議論された『バーミンガム自治体史』第7巻、1950-1970年⁶⁷⁾は、実現しなかった。以後、バーミンガム都市自治体が後援したバーミンガム史の小冊子は、刊行されたが⁶⁸⁾、自治体による本格的な市史の刊行は行われていない。

『バーミンガム自治体史』刊行の中止や市史第4巻が企画されなかった経緯について、バーミンガム市文書館に所蔵されている自治体の記録が1970年代初めまでのため、現時点で、自治体の一次資料に基づきながら明らかにすることは困難である。おそらく、市史の続刊や自治体史の刊行の中止は、バーミンガム都市自治体の関連委員会が、19世紀後半以来の都市の統治観や方法を具現化した『バーミンガム自治体史』や『バーミンガム史』の刊行の継承、単なる自治体の顕彰行為、そして、(権力の源泉となる)記録として都市史の刊行の継続を断念

65) 注48、49を参照。

66) Cannadine (1976), p. 544.

67) BAHS, BCC, GPC, 13 Dec. 1971, BCC 1/AG/1/1/61, 14 Apr., 14 June 1972, BCC 1/AG/1/1/62, 15 Jan. 1974, BCC 1/AG/1/1/65.

68) Dick (2005). 20世紀後半以降、自治体の市史とは別に、Skipp (1983); Upton (1993); Cherry (1994); Hopkins (1998), (2001); Ward (2005)といった近現代のバーミンガム史が刊行された。

したことによるもの、と考えられる。さらに、前述のとおり1970年代にも兆候が見られていたが、バーミンガム都市自治体における労働党と保守党といった党派の組織化と対立激化、19世紀や20世紀前半に起源をもつ都市エリート層の都市自治体からの退場、自治体議員の出自や利害の多様化といった一連の変化⁶⁹⁾も、自治体による包括的かつ統一的なバーミンガム史の刊行を困難にさせた要因、といえよう。

また、19世紀後半から題名と出版者を変更しつつほぼ毎年刊行された『バーミンガム年鑑 (*Birmingham Yearbook and Who's Who*)』は、年毎の自治体の記録や同時代の制度の概要を掲載しており、『バーミンガム自治体史』を補完していたことも、上記の自治体史を含め市史の続刊の刊行が中止となった一因であろう。これらの年鑑には、都市自治体の市議員や市参事会員をはじめとする主要な自治体の役職者に関する個人的情報も掲載されていた⁷⁰⁾。このような年鑑が目指してきた活動は、都市の公的な空間や文化を形成する「近代的な」営みともいえる。そして、このバーミンガムの年鑑の刊行も、1998年に終了した。こうして、20世紀末には、自治体による市史や定期的な都市の案内の公刊といった近代的な営みの一つは、終焉を迎えた。

本章をまとめると、1952年のバーミンガムの市史と1974年の続刊の刊行は、都市自治体、特に、都市エリートによる統治の記録と正当化の試みであった。例えば、現在も都市や社会政策に関する研究で参照されることの多い⁷¹⁾ シビック・ゴスペルに関する歴史記述は、都市自治体内の都市エリートが中心となって、「最上の統治」の事例の一つといわれた一連の改良事業とそれらの政治・経済・社会・文化的背景を記録し・参照する営みとして、とらえることができよう。この市史の試みは、ギルやブリッグズといった歴史家の調査と記述といった個の営みと結びついて実現した。他方で、バーミンガムにおいて、都市エリートの都市自治体

69) Sutcliffe and Smith (1974); Newton (1976).

70) *BYWW*, 1930, 1938, 1950, 1952, 1953, 1966, 1971, 1973, 1974.

71) 例えば、Szreter (2005), pp.400-406. また、Hunt (2004)を著したトリストラム・ハント (Tristram Hunt) は、労働党の政治家、国会議員として、地域社会の歴史にも言及しながら、政治活動を行っている。

への参加の停滞、産業構造の変化、市議員や市参事会員の構成の変化、そして、制度化された党派組織に依拠するようになった都市自治体の状況から、バーミンガムの市史に対する都市自治体の関わり方も変化していった。このように、バーミンガムの市史の刊行は、都市自治体の動向、歴史家の営み、20世紀前半から中頃までのバーミンガムの歴史的背景が相互に作用した中で、実現した。

バーミンガムの市史の刊行とは、19世紀の近代性をあらかず統治の手法を20世紀の現代の都市制度において実現した営みであり、この営みは、官僚機構や組織化された現代の組織に基づく関係というよりも近代統治を支えた人的関係や価値観に依拠していた。言い換えれば、1952年の市史の刊行は、20世紀の現代都市の制度で存続した、あるいは、再評価された近代都市の統治の営みの再現であった。

おわりに

本稿では、バーミンガムの市史刊行の過程・展開・背景について考察した。第一に、バーミンガム市史の刊行事業の過程や背景は、入り組んだ要因や歩みによるものであり、都市自治体による単純な自己顕彰の営みではなかった。第二に、バーミンガムの市史のうち特にブリッグズの巻は、これまでのバーミンガム史を継承しながらも新たな解釈も生み出して、バーミンガム史の基礎となり、同都市の歴史を越えて都市史を発展させる礎となった。

このようなバーミンガムの市史を含むバーミンガム史の展開について、P・J・コーフィールドによる都市の歴史的变化に関する包括的かつ複線的な位置づけに依拠しながら整理すると、以下のとおりになる⁷²⁾。

第一に、直線の歴史における都市という整理 (cities in linear history) では、コーフィールドも引用しているウィリアム・ハットンによるバーミンガム史の記述にみられるような18世紀に直線的に発展してゆく都市バーミンガム、という記述が、確認できる。このようなハットンの自信に満ちた18世紀バーミンガム像は、1952年の市史を含めて、バーミンガム史の歴史記述の中心の一つであった。

第二に、循環する歴史における都市 (cities in cyclical history) という整理が

72) Corfield (2013), pp. 828-843, esp. 831.

ある。19世紀後半のジョゼフ・チェンバレン等による一連の都市自治体を中心とした改革（シビック・ゴスペル）に関して、19世紀末のバーミンガム史の著作から1952年の市史に至るバーミンガム史の著作は、高い評価を与えていた一方で、1970年代、1980年代の都市史研究からは、再考がなされた。そして、21世紀現在、19世紀のシビック・ゴスペルは、社会関係資本の文脈で再評価されている⁷³⁾。このような一連の研究の流れは、循環する歴史における都市という位置づけと合致する。

第三に、革命的な変化を伴う歴史における都市(cities in revolutionary history)では、第二にあげたチェンバレンの改革や産業革命を歴史上の画期として位置付けるバーミンガム史の歴史記述と、合致する。

最後に、コーフィールドは、長期の諸力の中にある都市(long-term forces)という整理や、都市が有する傾向、例えば、都市建築等の動向や景観、人口、自然のモノ、社会や組織、緩やかだが確実に起こる変化の場、様々な状況との接続や調整という場等々といった特徴、を示した。バーミンガムの歴史は、中世以降、特に18世紀以降、景観も空間も大きく変容し拡大してきただけでなく、それらを支える政治・経済・社会・文化の制度や活動が入り組みながらダイナミックな展開をしてきたことを強調しており、上記の整理や特徴とバーミンガム史の記述は合致する⁷⁴⁾。以上のように、バーミンガムの市史をはじめとするバーミンガム史の歴史記述は、近代的な都市をあらゆる参照先として存在し続けたことが確認できた。

バーミンガム史が、より広義には近現代イギリス都市史(modern British urban history)といえるかもしれないが、19世紀中ごろから20世紀中ごろにかけて、イギリスの近代性を代表的にあらわした時期は、過ぎ去ったが、都市における近代性に関する参照先や近代性を継承する存在として、バーミンガム史は、今も形成されている。本稿は、都市の統治と過去の記録の保持・活用の相互関係について明らかにしたと共に、近代都市から現代都市への継続と変化のダイナミクスを

73) Szepter (2005).

74) Gill (1952); Briggs (1952); Sutcliffe and Smith (1974); Hunt (2004); Dick (2005).

示したのである⁷⁵⁾。

参考文献

一次資料

未刊行資料

- Birmingham Archives and Heritage Service (BAHS), Birmingham City Council, Borough of Birmingham, [Copy], Proceedings of the Council, Birmingham (BCC, BBPC), 1873-1877,
BAHS, Birmingham City Council, General Purposes Committee, Minute Book (BCC, GPC), 1874-1974
BAHS, Birmingham City Council, History of Birmingham Sub-Committee, Minute Book (BCC, HBSC), 1930-1974

刊行資料

- Allen, G.C. (1929) *The Industrial Development of Birmingham and the Black Country, 1860-1927*, George Allen & Unwin, London.
Birmingham Yearbook and Who's Who (BYWW) (Cornish Brothers ; Birmingham Post and Mail, Birmingham, 1930, 1938, 1950, 1952, 1953, 1966, 1971, 1973, 1974).
Black, H.J. (1957) *History of the Corporation of Birmingham*, vol. VI (1936-1950), The General Purposes Committee, Birmingham.
Briggs, A. (1952) *History of Birmingham, Volume II: Borough and City 1865-1938*, Oxford University Press, London.
Bunce, J.T. (1878) *History of the Corporation of Birmingham*, vol. I (To the year 1852), Cornish Brothers, Birmingham.
Bunce, J.T. (1885) *History of the Corporation of Birmingham*, vol. II (1852-1884), Cornish Brothers, Birmingham.

75) バーミンガムの市史刊行の背景・過程・意義に関する研究から明らかとなった史実や解釈は、近年、日本の地方自治体の一部にみられる自治体首長をはじめとする都市の中心人物等による市史への関与に関する議論に対しても、何らかの示唆を与えられると思われる。岡田(2015); 野田(2015)を参照。同点については、前掲の名武氏と高嶋氏からのご教示による。謝意をあらわしたい。

- Cherry, G.E. (1994) *Birmingham: A Study in Geography, History and Planning*, John Wiley & Sons, Chichester.
- Dent, R.K. (1894) *The Making of Birmingham*, J.L. Allday, Birmingham.
- Dick, M. (2005) *Birmingham: A History of the City and its People*, Birmingham Library Services, Birmingham.
- Gill, C. (1952) *History of Birmingham, Volume I: Manor and Borough to 1865*, Oxford University Press, London.
- Gill, C. and Robertson, C.G. (1938) *A Short History of Birmingham: From its Origin to the Present Day*, The City of Birmingham Information Bureau, Birmingham.
- Hennock, E.P. (1968) 'The Social Compositions of Borough Councils in Two Large Cities, 1835-19147', In H.J. Dyos (ed.), *Study of Urban History*, Edward Arnold, London, 315-336.
- Hennock, E.P. (1973) *Fit and Proper Persons: Ideal and Reality in Nineteenth-Century Urban Government*, Edward Arnold, London.
- Hopkins, E. (1998) *The Rise of the Manufacturing Town: Birmingham and the Industrial Revolution*, rev. ed., Sutton Publishing, Stroud.
- Hopkins, E. (2001) *Birmingham: The Making of the Second City 1850-1939*, Tempus, Stroud.
- Hutton, W. (1781) *An History of Birmingham, To the End of the year 1780*, Pearson and Rollason, Birmingham.
- Jones, J.T. (1940) *History of the Corporation of Birmingham*, vol. V (1915-1935), The General Purposes Committee, Birmingham.
- Langford, J.A. (1873) *Modern Birmingham and its Institutions: 1841-1871*, 2 vols., E.C. Osborne, Birmingham.
- Masterman, J.H.B. (1920) *The Story of the English Town: Birmingham*, Society for Promoting Christian Knowledge, London.
- Muirhead, J.H. (1909) *Nine Famous Birmingham Men*, Cornish Brothers, Birmingham.
- Muirhead, J.H. (1911) *Birmingham Institutions*, Cornish Brothers, Birmingham.
- Ralph, J. (1890) 'The Best-Governed City in the World', *Harper's New Monthly Magazine*, 81, 99-111.

- Ralph, J. (1893) *Our Great West*, Harper, New York.
- Skipp, V. (1983) *The Making of Victorian Birmingham*, Victor Skipp, Birmingham.
- Stephens, W.B. (ed.), (1964) *A History of County of Warwick, Vol. VII, The City of Birmingham*, Oxford University Press, London.
- Sutcliffe, A. and Smith, R. (1974) *History of Birmingham, Volume III: Birmingham 1939-1970*, Oxford University Press, London.
- The British Association [R.H. Kinvig, J.G. Smith and M.J. Wise] (ed.), (1970) *Birmingham and its Regional Setting: A Scientific Survey*, rep. ed., S.R. Publishers, Wakefield [first published in 1950] .
- Timmins, S. (1866) *Birmingham and the Midland Hardware District*, Robert Hardwicke, London.
- Upton, C. (1993) *A History of Birmingham*, Phillimore, Stroud.
- Vince, C.A. (1902) *History of the Corporation of Birmingham*, vol. III (1885-1899), Cornish Brothers, Birmingham.
- Vince, C.A. (1923) *History of the Corporation of Birmingham*, vol. IV (1900-1915), Cornish Brothers, Birmingham.
- Ward, R. (2005) *City-State and Nation: Birmingham's Political History 1830-1940*, Phillimore, Chichester.

研究文献

- Briggs, A. (1948a) 'Thomas Attwood and the Economic Background of the Birmingham Political Union', *Cambridge Historical Journal*, 9, 190-216.
- Briggs, A. (1948b) 'The Background of the Parliamentary Reform Movement in Three English Cities', *Cambridge Historical Journal*, 9, 293-317.
- Briggs, A. (1950) 'Social Structure and Politics in Birmingham and Lyons, 1825-1848', *British Journal of Sociology*, 1, 67-80.
- Briggs, A. (1968) *Victorian Cities: A Brilliant and Absorbing History of their Development*, Penguin ed., Penguin Books, Harmondsworth [first published in 1963].
- Briggs, A. (2012) *Special Relationships; People and Places*, Frontline Books, London.
- Cannadine, D. (1976) 'The 'Best Governed City', Part Three', *Historical Journal*, 19,

536-544.

- Cannadine, D. (1980). *Lords and Landlords: The Aristocracy and the Towns 1774-1967*, Leicester University Press, Leicester.
- Cannadine, D. (2000) 'The Bourgeois Experience as Political Culture: the Chamberlains of Birmingham', In M.S. Micale and R. L. Vietle (eds.), *Enlightenment, Passion, Modernity: Historical Essays on European Thought and Culture*, Stanford University Press, Stanford, 148-164.
- Cannadine, D. and Reeder, D. (eds.), (1982) *Exploring the Urban Past: Essays in Urban History by H.J. Dyos*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Checkland, S.G. (1953) 'English Provincial Cities', *Economic History Review*, New Ser., 6, 195-203.
- Corfield, P.J. (2013) 'Conclusion: Cities in Time', In P. Clark (ed.), *The Oxford Handbook of Cities in World History*, Oxford University Press, Oxford, 828-846.
- Daunton, M. (ed.), (2000) *The Cambridge Urban History of Britain, Volume III 1840-1950*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Dyos, H.J. (ed.), (1968) *The Study of Urban History*, Edward Arnold, London.
- Fraser, D. (1979). *Power and Authority in the Victorian City*, Basil Blackwell, Oxford.
- Gross, C. (1968) *A Bibliography of British Municipal History*, 2nd ed., Leicester University Press, Leicester [first published in 1897].
- Gunn, S. (2000) *The Public Culture of the Victorian Middle Class*, Manchester University Press, Manchester.
- Hunt, T. (2004). *Building Jerusalem: The Rise and Fall of the Victorian City*, Weidenfeld & Nicholson, London.
- Jones, L.J. (1983) 'Public Pursuit of Private Profit?: Liberal Businessmen and Municipal Politics in Birmingham, 1865-1900', *Business History*, 25, 240-259.
- Leighton, D.P. (2000) 'Municipal Progress, Democracy and Radical Identity in Birmingham, 1838-1886', *Midland History*, 25, 115-142.
- Morris, D.S. and Newton, K. (1968) 'Birmingham Council and Birmingham Population in the Context of England and Wales', University of Birmingham, Faculty of Commerce and Social Science, Discussion Papers Series F., 1.

- Morris, D.S. and Newton, K. (1969a) 'The Social Composition of Birmingham Council, 1930-1966', University of Birmingham, Faculty of Commerce and Social Science, Discussion Papers Series F., 2.
- Morris, D.S. and Newton, K. (1969b) 'The Occupational Composition of Party Groups on Birmingham Council, 1920-1966', University of Birmingham, Faculty of Commerce and Social Science, Discussion Papers Series F., 3.
- Morris, D.S. and Newton, K. (1969c) 'Chairmen and Non-Chairmen of Birmingham Council', University of Birmingham, Faculty of Commerce and Social Science, Discussion Papers Series F., 4.
- Morris, D.S. and Newton, K. (1969d) 'Profile of a Local Political Elite: Businessmen on Birmingham Council, 1920-1966', University of Birmingham, Faculty of Commerce and Social Science, Discussion Papers Series F., 6.
- Morris, R.J. and Trainor, R. (eds.), (2000) *Urban Governance: Britain and Beyond since 1750*, Ashgate, Aldershot.
- Newton, K. (1976) *Second City Politics: Democratic Processes and Decision-Making in Birmingham*, Oxford University Press, Oxford.
- Szreter, S. (2005). *Health and Wealth: Studies in History and Policy*, University of Rochester Press, Rochester.
- Taylor, M. (ed.), (2014) *The Age of Asa: Lord Briggs, Public Life and History in Britain since 1945*, Palgrave Macmillan, Basingstoke.
- 伊藤航多 (2009) 「市民文化としての「郷土研究」－19世紀イングランドの都市における歴史文化とその社会的理念」『史学雑誌』118(10)、1776-1799頁
- 岡田知弘 (2015) 「『新修彦根市史 通史編 現代』刊行中止事件と出版に至る道」『歴史学研究』933、56-63頁
- 野田公夫 (2015) 「『新修彦根市史通史編 現代』発刊中止問題について－何がどう問題になり、どうなったのか」『日本史研究』629、64-79頁
- 長谷川貴彦 (1993) 「階級・文化・言語－近代イギリス都市社会史研究から」『思想』828、110-134頁